本所中ノ郷竹町
万龍
黒川金治郎
第壹集
弐

本所 中之郷竹町 黒川金次郎 貸本

開卷驚奇俠客傳第壹集巻之二

東都 曲亭主人編次

第三回 黒夜を照して螢火海濱に導く 明察に誘りて鼠輩恥辱を被る

却説野上史著演。後門前に立出て。小六丸に對面して莊客們と喜しそ俠に
英直ぐ柩を宿所に迎入れて。且客房に處を定る。登時母屋小六丸も倶に柩の後方に跟
隨て客房に赴く程に著演の妻晩稻。白服に更て。這所に來て。母屋
小六丸に對面して。哀戚の涙を拭ひ。遠く他郷に旅宿して。父を喪ひ良人の後
を追て。悼み然として正首に。舒く勦り慰れ。母屋小六丸も。共に主人夫
婦の恁丁寧なる欵待態に感じ。且うち數杯して。姑くの応もなさず。數杯の舟の樽を
絶て。ちとよくべの磯傷に。音と共に久後まぢの親子のうへを。涙をけ。俠の程に著

演い英直の柩を早く送り来ぬる轎夫们ふ酒價ふ銭を取らせんとて後輿共倡返し遣し却出居の北のくまる一室を猛可ふ搔帚して机案二脚を上座ふ推並て登ふ柩を這首ふ移さて屏風をめて亮楠子とその餘も三方を隔遠らしたる前案ふ樒を立香を焼くふ向の飯の准備をも敷ひ誘とて母屋と小六丸を弁一立て拜さしめ次ふ若演立晉を找向ふ合掌し心の中ふ念をも維俺未見の兄弟館生尚ほ求めらば若演が只今報るよを聴ね甘木弱冠の昔より惟爭愛を旨として人の危窮を救ふといへども位高く富栄て民の父母たるのるゝねばそを九牛の一毛のそ普く人ふ施ふ由るく庶名徒ふ年を歴て德の菲薄を羞ぢるふ豈ふ人や和殿ふ知られそのを妻と子を託せるふ迺空翰を以て未亡の人母屋をふのたるふ異姓の兄弟る義をのせるる因く竊ふ推量るふ紙中ふ一字も写されざるハ千万言ふも尽ほ優て人を知りる意味深るはれば唐山の常言ふも女子ハ已を欲ぶりの為ふ勉て貌ら男子ハ已を知るの

為ふ必死もるとハ某既ふ和殿を知れそかくの如ク迷託ふらんそ死力を盡さ添ぶ這奇偶のとるるそ和殿ハ則新田の類族脇屋次将の家臣なゝ俺大父野上目ハ贈中納言義貞卿の鎌倉攻ふ従ひまるそ元弘ふ功あるのを料らぬ又這舊縁ふ何ぞ一時の値偶るんや陰鬼陽人異るとも柩を留めて義を結ぶ心ふ異姓の兄弟たるべくけふる緦麻九十日るの服を稟く戚々の情を盡さゝ住れば内室令郎のうへを萬づ事ふ後ふまるて妹と妹と俺兒とあり心ふ教るふ師を撰を禍を避け偽りを御ぶて人とるさまく欲を某天性不幸ふて齢半白ふ近くるを絶く一個も嗣ふるそ小六が成長を俟て俺這荘園を譲て俱ふ祀を受ん是某が情願を微言誠を示さふ足らば衷情述るふ餘るふ即便香華の清奠を薦めを旅魂を迎るん尚く御食ふ弥陀仏々々と唱れば晩稲も良人の後方ふ侍りて会誦ふ時を待ば樒果野上夫婦ハ母屋小六丸ふ飯を羞めを旅宿の艱苦を問慰ふ懇切ふ管待を接支

ヨヌけれが茎茎長紀日ゑゞ乗敢ゑく草育れと又夕饌と鷹めゝる恙ゞ来ハ一種ふゝく精
進ふゝろゝと用ひゝれゝる母屋ハ今宵も柩を成りて明さんとゝ欲けるを著演ゞて頭をゝち傳ゞあん
別ハゑゝ人の病中ゝる睡ぢゝける疲労もあゝん俺ゞ夫婦ゝる任ゝと息子と倶ふ這次の間へ
快銀ゞく就寝ゞ臥簟も儲てゝゝるゝを母屋ハ推ゝとゝを厚くゝけれゝも非如裁疲丈
睡らぎとても一生涯の別れゝるまゝらゝ疲労を戰ふゝと固辞むゝを晩稲も共ふ謀ゝゝるゝ
さゝハ然るゝゝゝ俺ハ任ゝふゝゝ俺ゞ夫婦ゝ倦ゝゝ疲労を睡ゝゝ疲労を
増ゝ病裁ゝゝ後の憂ゝゝゝゝゝ子の為ゝゝゝゝゝ這首ふ
ゝゝゝ程ゝ小六刀祢も就寝ゝゝゝゝ休ゝゝゝゝゝ親切ゝけれゝ
母屋ハ竟ふ推辞難ゝ小六丸と共ゝふ告別ゝ退ゝく枕ふ就ゝけゝ然程ゝ小六丸ハ
睡らんとゝるゝふゝゝれゝ獨熟思ゝゝ俺父の亡骸ハ野上の翁の資ゝゝゝれゝ若ゝゝ心ゝゝ
朽ゝくも悲ゝゝ親の主君と宣ゝゝ右中将の首級ゝ由ゝ濱邊ふ梟られゝゝ終

ゝ大島の腹ゝ肥ゝゝゝゝ痛ゝゝれゝ俺假名川の宿ふ在ゝ時那旅客ゝの噂ゝゝハ
六日已前のゝゝれゝハ首級ハ今も那濱邊ふゝゝ潜ゝ
ゝゝ奪取ゝゝ還ゝゝ鎬ふ大人の柩の内ふ飲ゝ葬ゝゝゝゝ便是主君の為ふ亡親の
志ゝ継ゝく做ゝふゝとゝふ。俺豫ゝゝ是ゝゝの所行ゝ志ゝゝゝゝゝ假名川ゝゝゝ
来ゝる轎夫ゝふ問試ゝく鎌倉路を粗ゝゝ這首ゝ距ゝ遠くゝゝゝゝゝ島夜ゝゝゝ迷ん
や。嗚呼ゝゝと肚裏ふゝゝゝ決ゝゝ快ゝゝゝゝ甲夜の程ハ外見ゝゝゝゝふ便ゝ宜ゝゝゝ且
く時を移ゝゝ既ふゝゝ人定ゝ母屋ハ疲労ゝく孰ハ睡ゝゝけゝゝ上の間ゝ主人の妻の咳ゝ
四ゝふゝけゝ小六丸ハ折ゝゝけれゝ横撥遣ゝ身を起ゝく枕邊ふ措ゝゝ小刀と合ゝ腰ふ
跨ゝ燈火ゝゝ滅ゝ搔拂ゝゝく潜ゝく縁頰ゝ遣戸の末ゝ半開ゝ庭口ゝ後
門のゝふ赴くふ奴婢ゝゝ甲夜の遽ゝゝゝゝ紛ゝゝゝゝゝ角門のゝゝ鎖ゝゝ
けれゝ密ゝ推開ゝ走ゝふ五月の天の癖ゝれゝ降ゝゝゝゝ定めゝゝ如法闇夜ふ辿ゝ

御間ゆゆしを心當ゆ鎌倉を投て急げども人家離れて田ゆ畔ゆ岐道さへゆまどれば去方を右
往左往と思ひ難く停在くせん術もなきまま彷徨う叢林陰とり忽然と許多の螢群飛て小
六丸の身邊ゆ來て路を照らし先ゆ進て這身の為ゆ御道を做さんとえて奇多の車
亂ぐ夜学の燈火る易ゆ思ひとの故實人作ゆと自然ゆ思ひ此は童子の忠孝を神明佛
陀の相憐まて恁る冥助を錫ひ給ひ小六丸今の奇特ゆ感歎く此も擬身の螢の進む
從ひて四囲ゆ來る程ゆ今いまの坂東路六町一里十五六里ゆ及ぶらんと思ひ果て由比の濱ゆ
來ゆけり。その時迫ゆ許多の螢いまの四下を去ぬと思ひ小六丸ゆ怡悅ゆ勝
ぎ。竊ゆ四下を見ゆ義隆主從六個の首級ゆ梟て小塘隄の上ゆ在り淺き穴を掘ぬ
めねど猶豫せば遂ゆ戍卒ゆ知られやまんと思ひ傍の樗の枝ゆ進み走り渉り
又く視るゆ主從の姓名ゆ掛る牌を云云と認れあべうもあらざれば今も初て死顔を
実の父と神ゆ身の知るとゆ知るも自然と備る孝子の忠勇義隆の死首浅杠

抱ぬ樹下へそぶ伏擅と降ぬる。低り程ゆ這濱ゆ苫屋ゆ夜と戍ゆ乞児ども件の
鄙ゆ駭覚ん癖者ありと呼ぶて無ぬる莊戸拂ゆ突ぬ。二人ゆ棒引
提く走り出く佶とれば浦風和る夏の夜の四下ゆ群飛ぶ百千の螢火の光ゆ薪樵ゆ
鎌倉山の名ゆ星月夜ゆ鮮明とれば今宵の一奇事ゆ怪むべ一個の童子が
義隆の首級を奪ぬ走去んとけば他逃ぬと呼ぶて先ゆ進む一個の乞児ゆ食る
棒を振内と擊る倒ぬんとて走る蒐ゆ小六丸ゆ快ぬ脱れぬと思ゆ左ゆ首
級を取る。右ゆ小刀を引拔て受流し砕拂く防戰ゆ程もあらば跡ゆ進む両
個の乞児ゆ左右弁一捕篭て競ん蒐ゆ
小腕ゆ拄ぬ。ゆゆ最も危く見えけ浩処ゆ一個の武士の夜行衣ゆ裳ゆ四囲ゆ
はゆ小塘隄の蔭ゆ顯れ出く合る潛行蕉灯を投棄て走蒐ゆ。小六丸の左右ゆ
擊んと進む一個の乞児の項髮抓ぬ引着て足を飛ん礙ん躓れ乞児ゆ身を倒ぬ

春玉堂印行

春玉堂印行

行手なる濆邉の石を膳を打と吐嗟とぐろ叫びもあへず仆れけり程もあらせず又一人の利を捕て引遠らと肩を引掴て投るを間許怪鳶で已が合る捍棒を頭を拂ふ苦と叫ぶ声ハ汀渚の友鳥驚く仆る俄ふ仰反て沙石ふ塗れて挿れる先ふ進ミ一個の乞児ハ今あの鐸の光景ふ駭怕れ度を失ひ逃んとまるを小六九ハ追ると透ず跟入て内めくる刃の冴ふ乞児ハ首を載る落されて軀り後ふ倒れる。恐り程ふ件の武士ふ投悩され両個の乞児ハ苦痛ふ身を起と組んと進むを件の武士ハ又推隔左右ふ両個の首捉禁て探返し復投居て推累さふ背の上ふ膝折布て動ず居ハ援を沒る。小六九ハ仇と走りよらんとしけるを件の武士ハを抗て這首骨ハ忽快ふ拔と推禁める好意の一言主を誰とあら浪の寄せる返る真沙路ふ迹を埋めて欺び。述る間る磯松原の樹の際立潛て故来一方へ去る皐月の雨催ひ有ける蛍ハ人ぞ雲の絶間ふ洩る星の路の宿潦ふ映りて景を栞ふ急ぐ。

然程ふ小六九ハ好ふも別ふ暗ふ夜を足ふ信と走る。稍踰越ぬ来ふ時ふ暗踊る音ハ笛簫の音猛然と吹暢と首級窃盲を逃去ると罵る諸声騒く。土兵鐵人鉄ふ炎蕉火振照と赫ふ既ふ火急ふ小六九ハ這形勢を見ふ恐れ腮を逃れても蟒の口をいかにせんとそ狗死せば右少将のかく首級ふ復さるつまらで母れの歎ふも痛すく猶且恩人野上の翁を連係せるとあらばそ仇と報ふ似ふ今ふも追兵ふ近着ぬとも又只時運を天ふ任て脱るんめと思を心ばかりふ急げども投く往方ハ野干王の烏夜ふあれば聲者の杖ふ離れる者住ると覚て歩の運びの果敢ふ後ふ逼ふ雑兵ハ見ふ光わかる十人の電光御誕ぶと呼ぶを撻を撻せば身を淪と閃りと避る小六九ハ一期の危窮ふ心逆ひ前ふ小川のあふを覚ぶ登時追捕の雑兵ふ対推ず耶と声を被て復撻つ手を小六九ふ背ふ受て快走る勢ハ白を輾を如くれ件の小川へ忽地火と陷る吐嗟と叫ぶ

声と共に愕然として驚き覚まされば是るん南柯の夢にぞありけり。小六丸は覚ての後も胸ちゝ騒ぎて安らぬ心を鎮め頭を擡て彼此と考へるに身は甲夜の侵かして母の側に臥て在りたりと思惟るに俺豫ねて右ケ将の御首級の事心に懸りて大事に取ぬと思ひ入れば

とゝるに轎夫们は鎌倉路を向ーとありそを這古又の為に比は初旬の烏夜なれば潛ぶに便うよりのゝ不知案内の夜行るに逆その准備もなく不覚に出て過失あば本意を遂ぬことを這身を其処に喪ふべしと得に陥むもあれば必ず栗さへ寝の労頓ふとて怠まぬに奇しき夢さへ見ーにあらん然るをも夢の中に俺を援け那武士を誰と知るよりーーーども語音は野上の翁に似る件の翁は年戦死の髑髏一萬餘級を聚合て葬りぬとこの義氣任侠の趣を偽らるるーもあれば右ケ将の首級を隠さんと欲しる同氣同憂俺夢に入りて幻にぞ教ふる欲倘小六丸俺意中を告ぐ資に做さるべしそれに優る後見あらんや然とて果敢る夢を憑まで。

明々地あり譚ぐ通りの小ぶ死と思ひ難ず深念の時を移さぬ遊行寺の鐘枕に響音ぞ窓ぐ窓ぐ冬ぐむ夏の夜の明くとそ島の屋鳴けば母屋ぬ小六丸も起出つ漱ぐ。躰と柩の頭に向ぐ。主人夫婦は昨夕の通夜の疲労さとと同慰まぬ夫婦は且くぐち譚ぐ。辞と便室に退ける。登時小六丸は母親と共に香を焼き水を向く柩を拜ぐ中に昨夜夢を一趣を告ぐ冥助を黙禱頭を擡てらく視れば

きのふまでありとあらぬ柩の上に置れ白布の大袱を下無ぐ長覆きたれば何ぬ知らんと訝ぐ人のぞ来ると影護ぐ。ぬ立ぐ。奴婢们は朝の炊ぐ濃ぐ紛れて。ぐ。ぐ看るものも合れぬ小六丸は這内ぬと思ぬ心の慌ぐ柩の後へ立淀ぐ密と袱を掻揚ぐれば水三ぐ装べりける。六箇の小瓶をぐち見ぐて柩の上に措れ。訝ぐとぐべぐもあれば上ぐ一隻金令飾ぐ。ぐ基を推開ぐれば人の斬首ぐ。その面影は夢にぞ。隣屋右

少将が肖こうけ。そも什麼いかに。駭嘆とこもるく。浅れる五箇の孤もみる。一箇々々まその内。そなれが亦是首級。此彼夢想と暗合の奇特を感ずるまま。神童。六箇の小瓶と故のごく。柩かのぎりと遽メく又秋をうち被て退坐とるを文紀事の情を案ずるに件の小瓶の内るい脇屋少将主後の首級なると疑ひる。おるが昨夜ある人の公羽いかづらい那処の計ひとの陰徳を做ーこ。依然ぐまい腹心のものを。竊に奪取せ。あるんまるまも亦俺親の為ぜうれ。忠信知恩公羽いかづらを義士ゐるる徒と知らば俺も亦共侶ゐるをくべりーが恨る所い俺年才のまぐ千わづる足らぬれい孤疑と昨夜潜びも出ぬ徒が暁ぜ。悔ーはまるいれども魂のあくれ出るまの期が遇ひい。知らでも有ぬ。俺宿念の虎ーやぎとのかぬるを和漢あ。べく。傳聞ぎ良善の公羽と微妙く義を結びくロ。弟とーもるりあひ。俺父も亦凡人ぐ。身後を餘情深ゐる。現有ぬ。父のやとを。過去ーかきへ想像る。嘆賞あるるく曾ぞ。吾ぬ感涙の外ぐるる。浩

処が若演が走りく便室るるぞ。あるぞ小六刀祢允ーを。ぬれる東西のゆ。ぬるとのひく。躯件の小瓶と。ぞ。どもの身と。牆がーと。ひとるが寄せく那秋の被ーー。随が推果ぞ。ぞるる肩が引裂と走りく便室ぬぞ退りけ。當下母屋が浄るるとく。衣の裾り。縁頬より。素く障子の裡面が入ーを。小六ぬる等着と。目今あるーー。綜の趣并が昨夜見ー。夢の為体と。見ぬーを。憶がる六箇の小瓶が。歛れい。主の公羽が。俺父の為が竊と隠ーる。石山ゐる主後の首級がを。あるるぬ。俺身も亦豫るるぞの計校いるるぬ。不知案内のぞ。ぬ夜ゐが。深ぬるを。陷ぞく。事が後れー。悔ーはるぞるるーと。同ぞあるぬ。正が知るるーー。ぞるるぬ。母屋をるるぞ。空と。胆を洪ーー。且感ー。且沈吟ーと。四下ぞるるぞ。今ゐてめゐ。野上の主の恩義ぬ。則ぬ神佛の加護利益も。提ーーる。成敗ぬぞ。ぬれるも賢立く。這方より。問ぬ。西ぞ。ゐが。ぬるぞ。ぬ。何ぞも。心が。秘ぬ。那方ぞ。より。低ぞと。報ーるる。日ぞ。ぞるるぞ。ぬれ。ぬ。ぬぞ。密ぬぞるぞ。数言る。惺惚ぬぞ。その言の葉ぬ。敏ーーるぬども。身ぞ。捲ぬ。百夏の日。ぬ。陰の見ぞる。状

はかりをかうるふ。ふるび枝の露欲共侶ふ。乗時袖をぬ濡りけ。怎而早飯を果し比著演い又出さく来つ母屋と小六丸ふ對ひくふ。棺槨の准備をふ。たれ。既ふと整ふう因てけふ黄昏ふ安墓の式を行ふべ。墓所ハ則俺香華院ふ。遊行寺ふれば最近う。小六刀祢い墓礼の供ふ立ん上勿論を為ふ喪服ふ准備をう。然とくそこふ華美を盡しを外見を上旨とみんと。俺好ぎ所ふ。ふ棺の厚三寸と。いへ。ふを周の時の制度ふしを曲礼ふ詳へ姫周の時の三寸ハ後世の三寸弱うべ。我邦も亦往古ハ士庶人ふ墓碑を。後世士民僭上とその礼ふ違ふを。巨石を畢ふ碑銘を勒しを。人工を費をもまうう人ハ上うう生ふ。又土ふ帰らぬを。墓ハ朽。その速ふ朽ふ哉とよりと。然だれ今の世ふ生れく。古ふ返を難う。俗の宜ふ従ひ。ひうう斟酌ふべ。のみとふ母屋も小六丸も耳を傾け感服しを。苟且うう外艱。貧助ふ徳義を仰ぐのみ。いうで宜くよろしくとふよう外いうう。然程ふ藤澤南郷の里人ハ福良長者の親族の旅宿ふ病く身まうう。柩を迎へく遊行寺。今青安墓をと偽ふく。咱も送らん他も亦吊送せとふ。ふうの黄昏ふ聚ふとの一千餘人ふ及びうう著演ぶ家の門前う。陸續とし間断ふ。人の山做海を做しを。覗んとを街頭ふ立ち。又棺を本堂ふ扛居さを。衆徒佛前ふ四維列で。追薦の讀経丁寧う。住持の引導偈句果で。棺を安ふ下さとを。小六丸ふ相随ひて初て墓堂ふ出ぬ。著演ぶ又別ふ。安せたう安ふ。其処ふふの日後僕ふ持一来つ。六箇の小瓶。此彼一所ふ瘞めとく。道人ふ指揮しを。且ふ一箇を安の正面ふ下さ。ふを義隆の首級ふ。却又送れる五箇の小瓶。その左右ふ埋ける。此ハ是何ふ。船田鳥山高柳堀口江田ふ五従臣の首級ふ。ふと猜せうる。當下著演を。茶毘の寺僧と。従ひ来つ。里人ハ。ふう。這瓶を飲ハ。俺年八才ふう。春の比初ふ習せ。日ふう。五十ふ近ふ。昨

今年迄年来用敗したる禿筆をそのまゝ貯へるゝ事を曲徴の文字を寫せ
極遣に無ぶるめるめるぐと思ひ付けれど藏め置て酒今宵の便宜に任せて捨て筆
塚を送さんとその所為ふるんむ一唐の僧懐素がその年来の敗筆を瘞めて塚を築
し筆塚とのたまへり載く唐国史補にあり任れが是筆塚とのたまひ古舊の西安の
べやと説示せの道俗弁一感佩して舊怒を疎して新親を利の三走る今の世に
敗る筆にも無ぬで本を忘れ故に心操に有がくてそれと連の稱へて己げりて小六
九のこ秘策を知れが箇痛くぶるめるる人の及ぶ著演陰徳情義に感激して今
後折ると是なるの恩恵を復さぶられ人の子と生れる甲斐あるとぞ思ひける既に
英直の棺を這時莖果の帰送の衆人に先ちて退るもあり後れて友を俟もあり
小六九の著演に俱せられて更蘭し比野上の宿所に還りけり是より小六九の妻
親と共伯に喪る竜居て一室を出ぬその過七々忌の遊行寺に詣るに著演も

亦敬を廢して兄弟の忌服を受たり這時藤白棚九郎安同の鎌倉に宅地を賜り家
作落成の日をそのゝ移徙せんと思ひ人義日もあれが妻子の氣賀の宿所にて
その身の管領の館舎に出仕して稍八九日を歴る程に爾に由比の濱に梟られ屍脇屋
義隆主後の首級に第六日に及ぶ夜一箇も送られ紛失をさり由縁のなく埋めを窺
取ふ族と風声あり安同これをもちまく肚裏に思ひ件の義隆主後の俺忠節に
感ず捕へまゝせるれるその首故なく紛失とは人の批評も恥ぢ察ぶるその
偷児に竊に新田を見る屑奴欲然に那残嘗る犯人を捜捕ぶ
らせるべく上の御感に預り出頭を捷徑ぶんん便りもぶるを密ふその物色を探る
程に人あり報ぶ當国藤澤南郷の郷士に野上史著演と呼做るもあり他を名
たる侠者ふく皇義陣殺の髑髏一萬級を購集めて墓ぶるられるのをあ
生平に好く財を散して里人の貧窮を救ふとぞ聞ふ大公に新田義貞に従ひ兵粮を

つきと堂々義貞討れて世を憤り職を辞し退隠し鎌倉殿義詮基氏に出仕せざるの子孫相續て今の著演は至るまで最傲慢なるの者なれども先代頼朝の時より世緒ある舊家なるまでに斧鉞を加えられざるこそ這誼なれと推量るに脇屋義隆主従の首級を竊取つるの那著演が所為に敵の虚実を知らんと属賂を頼れて安同に欺かれ大々こそらば退き尋思を做さば俺の職あらば戒れば首級盗賊の著演ともの為に海汰れ所詮他が宿所に到りて威かして權ずが実を吐くべし。その折矢庭に捕捕て鎌倉へ牽りて是則俺が功名の職分なるべし。亦何人なれ非とも吐かんと肚裏に計較既に決りければ次の日氣賀へ休息の暇を乞時亭請て十四五名の後者を前後に立馬を直に氣賀へいでのもやがて藤澤の郷に赴き著演の宿所に呼門せて鎌倉殿の御内人藤白棚九郎安同が問試むべきなりとて渡向きて主人に對面

きべ。とそのなせける且と著演に老僕某甲をもて答るゆう。偶光臨のよしを乗るとはいえども著演いまだ日の日見参に入べきのやひとつとのなせも果て安同は眼を瞪らし声苛立て。そもそも亦自由の至り。縱喪中に在べきあれ俺私の事なるに鎌倉殿の御用なるに出て會ざるとは。異説に及び推量て項髪抓て牽出さん。然でもあいなき辞去なるやと敦圉暴く罵懲せば老僕に怕れて退き却著演に恁々とありつる随に報じ著演阿容る氣色もなく。あらしんあり且客房へ案内をして茶を薦めや。俺今出て對面せ。とのなるに客房なる上座に坐を占て。あらかじめ形のごとくに欵待せば安同いさもとそ。著演が出て来ると今欵と侯程に著演は凶服の依にて飾らざるを立て寒暖と舒来意を問へば安同は究竟なる後者四五名後方にて權威を二人を声高なるに俺發向に別説あらば南方の落人なる。脇屋義隆主従六名の月廿四日の

夜底倉を誅せられる。首級を由比の濱に梟られ。第七日に及ぶ夜その首送る。紛失のはなはだあり。あるほど和殿に虎名を好き。敵自方の差別なく。年来彼堅陣殘り。

のれ。髑髏を集めてこれを葬り。且私恩を施し。故なく人に東西を取せ。その身と共に父祖三世職を辞し。御士と倡へ。官府を蔑如せり。加之祖父著佐。新田義貞に従ひ。懇に微力を盡せりとの。舊縁を今に忘れず。武家に臣をなすと隱れなく。なほ御聆に達しぬ。これを以推しこれ。那義隆主従の首級を當夜竊取。葬りて秘隱せり。欲ん疑に和殿にあり。討手を向られべし。前代鎌倉の幕下以降。由緒ある御士なるものそ。その内沙汰に及ばず。御高に義隆主従を。討捕てまゐらせ。安同をも擇出され。則密使に立られて。穿鑿の為来る。彼盗賊に外ならず。世評和殿に極く。陳ぜれども。免されず。逆徒の首級を隱せる。是則逆罪なり。兵衛佐著演に索を被と呼ばれ。従者に阿と答へ。寄んとせ。著演の声を聞。佐と聞く。人人疎怒せ。

某何ものの罪あるや。且のようを。安同に対へ。趣その意を。何を證据に那首級を隱せ。あるや。壁言に義隆主従の首級を某に隱せ。とて。今に至りて。なほ日を受く。況まのいらぎ況まのと。なられて安同性起く。噫悍々。盗賊なる逆徒の首を編。何で罪のなるべんや。島許なるとて。敦圍けども。著演驍ぎ冷笑ひ。原来御邊の武門の故実。なるを威をもて捷んと。言ふ秋知ぎ詳に説示さん。這方へ找て。大約敵の大将の首実検の故実あり。又その首を軍門に梟らるに日限あり。既に三日を過ると。或に首級を本国に遣し。或その邊寺に葬る。古例とも然るに。南朝の建武三年（暦応元年）夏五月。摂津州湊河の役に。楠贈正三位近衛中将正成卿。一家を盡して陣殁せし時。等持院尊氏卿の沙汰として。廻泉首三日の後。これを河内に遣して。その子正行朝臣に贈る。後又南朝の興国元年（北朝の暦応三年）閏七月二日の戦に。新田贈中納言義貞卿。越前足

左 けゞーても降りけを
借虎威狐九郎背野上
陽紙門小六九認寛家
右 ちゃ 渦の きこ
有像第五
あそのぶ

ちゆ屋
夏白なきたち
小六九

羽の槙嶋の田畔に流矢に中て亡あへと足利尾張守高經ぬし首級を京師に上せと尊氏卿の沙汰とし則梟首三日の後又その首級を齎し越路へ遣し玉ひしかは高經のぬし奉ゆく義貞卿の軀と共に首級を同国長崎の驛に稱念寺に葬りて墓を建松を栽薗阿白道和尚と道師とし當時その法號を源光院とそ号せり

金龍寺は當初上州金山城内にあり此程されて今は常陸国河内郡若柴にあり

けるとその本國上野に義貞卿の三男左少將義宗朝臣峯山紹碩禪師を屈請し葬礼を執行ひ更に又法名を金龍寺殿真山良悟大禪定門と号し依て金山の城中に一个寺を建立し寺號を金龍寺と呼做す先蹤總てかくの如く敵といへとも名將に匹夫にひとしくせらるるに非ず如此夫の罪せらるるも梟首とし三日の後并その首の有無を問れす律に由られぬるなれは義隆ぬしの首級とも梟首三日の内に紛失の詮議もあるも既に三日を歴さんにも有無を問ふとも国賊にあらざれは必これを梟首せず是その先祖を辱るを怕る故なりけり然はを六日あるぶ

まで那主後の首級を梟さるに仮に措きては只是有司の怠り欲先例を違ひて徒れに首級を隠せしのみ乎為ることとせらるるも今に至りて外なわを被るべきにあらざるの穿鑿に上の密詮あるとも必御邉の臆度に出る人を誣げて栄利を謨るに似非穿鑿をもあらんにも倘然るに其を鎌倉へ召よせて問せらるる爲に議論に何人か憚密使を這首に伏ひて退散せらるべ還りて異議に及ぶ共侶に鎌倉へ參上して訟をうしと虚実を糾さん快く返答せられとと席を指隙を找めて問かへしたる義理明辯に屈せらるる安同に其辟を舐て唖児の如くそれをとだろう面赧せる眼を睜て一句も出さず怯むと分らと苦笑ひして刀を引提て身を起て口功者なる長談に辯火をのと水に似て縛の坂徒々と雪えあげて呉くせん出来と候れいざもの兵仗と呼ぶたる席蔽障も暴に外面に出て出ると著演に送りもせず冷笑ひて袖ちに拂ふ躰て奥に退けり。

第四回 陰徳光境に入て奴婢を得たり
陽ト闘鶏に縁て主僕を倡ふ

恁りし程に小六丸も母親母屋も奥へ退きて客房のくに當て猛に騒しかりけるを。訝りて奴婢に問ひしより那藤白安同が密使と唱へて来つるよしを聞て胸の安からねば。その次の間へ立近づきて親子倶に一竊ぞ聞せしが安同がいひつることも又著演が答たる一五一十の詳に知られてひと愉快く思ふものから後に出来りのあらずやと有繋に心まかれども著演は後々まで母子に對ひて安同が来つることもいはざれば言の便のなきまゝに。母屋は初より小六丸も亦著演に件のよしを問も果さで已にけり。左れはあれども小六丸はその日藤白安同が面を初て認りしかば數ますくほしう思ふこゝろなくに惴りしかども。彼は主從ヨ八人數ぞ俺小腕をもて救ふに毛を吹て疵を求めなば禍主人に及ぶ可し。けふ安同を殺すとも老鼯のかよふ所をもとめらるゝは死する程あるべし。且く時を俟ぬは不如とおもひて

しつ胸を捺りて母親母屋と共に歩をぬくまで間窺て。そが侭奥へ退けり。童子なれ思ひ慮そを逞しけれ。却説三伏の夏過て秋の初風立しより侯となしに英直が卒実忌を迎へけり。あの日野上著演ハ母屋小六丸を携て遊行寺に詣て丁寧に好事執行し衆徒に布施して且英直の墓碑を建及義隆主從の首級を瘞て在所又五層の石塔婆を造立て羊毛阜塔の四个字を鐫たり。羊阜の二字は義隆の字の半體を存けるを。観るものなべてこれを暁ぬるぞ。筆塚ありとおもひけるぞ。中に小六丸のミ筆塚ならぬよしを知れども羊阜の二字をのミぞ悟らず後に至て学問せ。進む随意発明してある後漢の蔡邕が曹娥の古碑に題したる黄絹幼婦外甥薺臼の隠語に類せしを俺楊脩のオあるけれバ知ると遅しと思ひけり。是等は後語あるを古文の次第に識ものを法莚果しその夜丈著演は思ふよしを晩稲に示して側に侍らせぞ侭母屋と小六丸を招き近づけて杖を知らでごく俺们夫婦を過

鎌倉大草紙に相模守入道法名行倉と是則義隆のことなり

黄絹幼婦外孫齏臼は絶妙好辭の隠語なり楊脩が曹操と共に見てつひにその義を知りしと故事あり

世乃くさはの年来子どもひとりもあらざれいと憂いく思ひて人とて後ろをと第一の不孝とも祖先の祀を絶所以なり小るを思ひ切るも個義任をなすべしと宿望をなり成就

まで死まるとふとも後安くあの狡びを知るべ死のを今より小六を養嗣として俺荘園を譲

ばべ。然れども野上氏を冒して実の親の祀を絶せんとのふ思ひ緩俺養嗣を

もその本姓なる錦氏を名乗る両家をひとつに合せ野上氏累世の諸霊を祔祭せるべ

そもそも莫大の幸ひなの義と兼引ゆへ。とへば晩稲も共侶ふ世よ人の妻と。子

るべい七去のひとつとへば十稔以来幾遍う側室を薦めはべ。ふ色と好まれ心ら用ひ

られれば術もなく心苦しく思ふ。ふ来まとの家督を続せんと

ある俺使の間これを優くるとあるんや。俺身過世の罪障もとより多く軽る

らば後安くはるべ。必ず推辞ゆひそとのられて数多く小六九郎母の應のおばつるも且く

口と鉗くまり母屋いれをちはべ。るよりもあれ日陰の這児を然まで思られまるるハ

願ふてもなるべるべ。洪福で俺れども尚老朽る夫婦るれハの後とのお子選ば

生れゆハ必とやいわ思ふ。又十稔も経ずのひとも意ふん嗣のるるるべその折ふとこも

かも仰ふ随ひはべて自今い尚早ふ思ふ且く緩しゆひれと推辞せを著演ふ謙

退辞譲い人ふるべ。あの義い今曹思ひ起して。云云とのふ思わるべの女る比俺既ふ館生の

枢ふ対ひて拒言すもあふべ。然とも俺嗣ふせるべ。敷ひゆふ欲いふべ。と弊せと

思く怨ぶれ母屋の困ど答難しと小六九郎ハ然ゆそと思ひ汲べ小膝を找べ主人夫

婦ふ対ひくふ。尚総角る身をべくべで恁いで打出の杭ふ似てんゆうまで嗚呼ぶま

思く。思ハれるる知らぶはれど言をうけ。ふ重恩の厚ぶべふ。篤れハ緩人を焼と

水を汲む奴婢ふせられて使るとも素より願ふ所ふはる。況ん嗣ふせんとふ思ふ這身の

福を思ふ何とも敷ふく推辞むべ。然れ人の子を奉るふと遁ゆるのを五十ふ

足らで人の子を養ひゆふ早るべ。且俺们の世ふ憚るべ。ふ敷ふ続べ名家と

瑕瑾ゐるゝん。母の辞退いなの故のまことのひも果ゐ著演を頭と左右ゐうち掉ゝそゝ
ゐ愚意と組語をろ。在甘魚皆国の公冶長の縲紲の中ゐ在りけるを。孔子ハそをもて
戮ひゐなぞ。その罪ゐあらぎとゝく。その兄の子を以妻せ王ひ一とゐ本文あり。和殿母子共世ゐ
憚るも時運のあゝまむるのまゝ。その罪ゐあらぎ嗣ゐせざゝんや。然ーもあの
義を嫌ぞゐ日今上応を聴まほ。推辞ハ要るをとるゝぞや。連ゐ讒ゝ已ざりけれぞ。
母屋ハゆゝ小六九も。竟ゐ脱るゝ工を得ぞ。僅ゐその意ゐ後ひ一。著演斜るゝ教ひて。
介んゐけゐゝり一。小六九ハ俺嗣。忌関の日ゐ不平ゝの教ひを表ぞべ一既ゐ御士の
嗣ゐるゝてハ九と吸ぶと相応一ひゝぞ。小六九の九を除ゝく。錦小六とハんゝそゝけれ九ハ
共人の謙稱ゐゝみづゝゝ不才とハへるゝぞ。才をかぞと訓ゐ對へゝ却九とハへるゝ。
義をゝろゐゐへゝと諭せゐ母屋も小六九も。ゐゐ優ゝる著演の博学ゐ才ゐ感服
ゝく。ゐも亦その意ゐ随ひけり。却説その冬著演ゐ。小六ゐ忌の関一比吉日をトを盃

あゝく。小六と父子の義を結ぶ又親戚と里人ゐ。ゝを生器直酒莚會ゝ教ひ盡一けゐ。
ゝゝて著演ハ小六ゐ為ゐ師を擇ぶゝ。文を学一武を習ゐゐ著佐の時ゝゝゝ家ゐ
蔵書のヨゝゝけれゐ小六を讀書の初ゝゝ日毎ゐ數千言を嗜誦ゝゝ。その義理ゐ
通達一ゝく切磋琢磨ゝ。螢雪の窓ゐ小夜の深ゐを戮ゐ。武藝ゝゝ亦世ゐ名高
ゐ上泉武者助金刺秀武ゐ京師ゝゝ来ゝ。鎌倉ゐ僑居せ一ゐ師ゝ一随ひ。その
餘法水拳法坐撃相撲の技ゐ。その師ゐ誌ゝ。ゝ習得をとゝけ。著
演ゐゝく教ゝく恩愛実子ゐ異ゝらぎ又只ハ著演のまゝゝゝ。晩稲ゐ小六を慈愛
ゝ且母屋ゐも隔ゝく。相親ゝゝ妹のごゝく。姉ゐも優ゝて溝ゝく。萬事ゐ心ゝけられ一。母
屋ゝゝ屋ゐも謙遜ゝ。日々ゐ女婢们と共侶ゐ立働ぎとゝゝ。小六も亦実母養
父母の分測せぎゝゝを用ひ孝を盡一ゝく。禀ゝる因ゐゐ答ん。忘ぶる日もゝゝけゝ。看
官とゐゝゝせよ。小六ゐ文学武藝を習ひて上達せ一ハ年を累ねゝ。是ゝゝ後ゐ

ども併べて知ることの間話休題現陰徳を陽報あり積善の家餘慶あり
あるべきその次の年の春より晩稲月水ともに漸々身おのくゝ冬に至りて安ら
ふ男児を産ける時に著演い五十歳晩稲い四十三歳の初産なるに苦もなく母
さへ子さへ快肥立て乳も亦匱りなければ園宅の教ひらかべうもあるべき俗にいふの驚
紀稱へて年来作善陰徳の報ひあるんとはいもるべく當時の奇談ありかの低而
五十日百日の産室養ひ果て比母屋を小六と商量して有一日野上夫婦かの
鄭ふ小六を養嗣ふせんと宣せ折辞ひまつりて世ふ人の子を挙るに遅きもあり速きも
あれば姑く待せるひとまうせけるのるふなん人の及ぶ善根と年来植さるなる
功徳蘊りて八十萬の神の恵きまひりんるべ男児と女らふ挙ゆへ任れば
又はのれ家督を嗣ものが順ふ伝り願ふ小六を初のごく復任品かへすんと母子共
心を休らへ奴家がひとふあるべ小六も只顧願ひ伝らとふを著演ものも

声を張り立てそを又沙汰の限りを俺年五十ふ及びる今ふ至りて産しる子の成長を
又ふ餘命あらんを縱命の長くとそれ迄死るべきありとも既ふ俺庄園を總く小
六ふ譲んと約束せを変易て今ゆら何人ゆ與ふ生れ赤子ふのでもあるを小
六が弟ふなりて成長らが家僕ふして家妻の次貝助ふ安られんのを因てその乳母奴
婢之助と喝ふべ。と思ひけれども告げ事情を知られるらん西安るをと敦
圍が晩稲いさそと尉ふて恁宣ふ理りを過世りて嗣るをの人の子を養へどその
氣を引く避近ふ子を生むのもありとの世話をありへども亦據ふ伝るを
倘果て小六を養嗣ふせるより這児の生れうけんを然といふべ約束
易く小六を今ゆらふ又義任ふせられんや俗ふ頭安児ふ水の上ふ泡ふひとしとふ
この
這児がよくも育ん欲そも亦料りがたふ久後ふけて傷を負べ悔るも伝る甲斐を
云云と辞をんを俺夫の意ふあるべとへば著演笑げふ彼方へ母屋刀祢

晩稲が胃も俺と同じ。俺心は巖の如し。左ても右ても轉ぶべからず。これらのことを小六も既に身詳に伺ひしと。然る上妄念を絶せば復のがれるべし。必怨んだろうぬと。敬言をなす。義引聞くもあらばとて母屋へ回れ。辭もなく。言葉少く退出す。小六はよりを報知らせ。大人も亦母刀自も。箇様々々に宣へば。今はうゐなせんなき形。とのふ小六を嗟嘆し。野上氏を冒らぎとくも。身に一介の功もなくて。人の家督を續んのみ。素より願ふ所なり。況や今は養父母に正に実子あるのみ。猶且その意に後ぶ。後に至て人必奪ふべし。とのふべく。禍も又見よう。發らん。胸安くも思ひなれども。事情を按ずるに目今急に這の說に及び。然を受て洪恩を空に做すとあるのやせん。五年十年俟たるも。俺們が這志の果しがたきを。默して折を俟んのみとのふを母屋へ感嘆し。親恥を忘れ。仇の子簡をもとふ優うるとなる。然ばとて養父母を隔て疎畧に為るもあろう付きとて領ぜず。そもそもなるべく。伺のやう。須弥より高き恩人を。親に背せ子に

ぎとも。いうでら疎畧に為ふべき。宍を敏ぎ骨を折て報んとそ思ひ。その義に感ずるも安ふ思べ。とのふ母屋をいかく感し。耳に入れ果て。今後を又這一說をいはんとのも。野上の赤子に心を盡して。介抱一日も懈らず。愛を施すの大なるを著演ふ。屋樣に申て。總て小六と同うせず。襁褓も緜布のまふして。奴婢之助とぞ名つけ。然程に母屋の量義に英直の。病中死後の苦労患難。今は野上の資助なる。世渡りやまを紀に似ずとぞ。然とて人に縣りそなれば。胸苦しきなれば。悠ふ所以や月毎に積に疾に病に。遂に日ヨリ病に。ふるひ血色に初に似ず。全身いとく骨立たるを。小六を憂ふに。連て諫めて。飼茱を薦る。野上夫婦も幾遍となく。醫師に診せんとのふ。病臥まで。母屋を辭ひて從ず。猶心に思ふ。亡夫の遺言に。郎君のあん年の十五六になりあらん時。かんを素に生を生ずるとなく。先君より預りまつり。三種を遺ふ。折を

俟々黙止たりけれども。俺身箇様に耄て病に罹りて。猛に病瘉に閉られて。ぬるのみ
なれぞ怨に息絶ることありもせば。何人か亦俺身に代りて。辮倭々と郎君に報
ゆるらんものゝあらんや。然は折の用心にぞ書つけ置て。懐に覆ふるし。非如文辞は疎く
とも良人に見せし。趣を識さば後悔なきなるべし。と尋思をしつゝ密山々の件の首尾の顛
末を残日あまりかゝりつけて。重封にしつ。英直が送したる三種と共に日ごろ人目に
かけざりし。衣櫃の底に秘藏めて。鍵さへ要脊に放さゞるは知るもののたえてなかりけるを。徳
まで用心ありしかど。小六が年尚十二なる比なりければ益も立さで。母屋が病着
初にかゝりし痊るとはあらねど。二日と病臥ことはなくて。又四五年を経にければ小六も
既に十六歳。著演が実子奴婢之助は七才になりにける時に。応永十七年母屋は
久しく俟も不楽く。稍その折にありしかども。今茲も小六殿に亡夫の遺言を報
ずることなくいはでやみけん。去歳より便宜をまつるかけしに人に見せず秘言なる事を小六に文学

武芸の為に日として師の許にかよはざることなく。偶可宿所に在る折も左にも右にも外見身
くて秘事長談にぞ便を得ざる任に障にすぎて果さず。今茲も春過て夏去ゆきて。
秋楽月になりにける。休題復表。肇話新田左少将貞方主は最初陸奥を
落ゆきしと義隆朝臣と立別れて。越路を投て起行し。且く北国に世を潜
びて再時運を揣しあるに。越後は新田累世の由縁ある地方にて。且貞方主の伯
父なりける従四位下春宮亮義顕朝臣の嫡子は。建武元年に任せられて。当時越
後守なりし又貞方主も南朝の建徳二年に越後守に任せられ。后後天授三年に
従四位下左近衛の少将になされてより。此彼前後の任国なりしに。然でも其旧
族ヨスクリ。這義によりて勇士を募らば。更に又義旗を揚るよしもやあらんと尋思をし
ありて。躬ら越後に赴きて。且く時を俟ほどに現乱世の沿習にて人会仁義を疎れば
何人か旧縁をおもへる閑居従に年を累ねて。幾作たなるもなく。剰自方に反忠なる

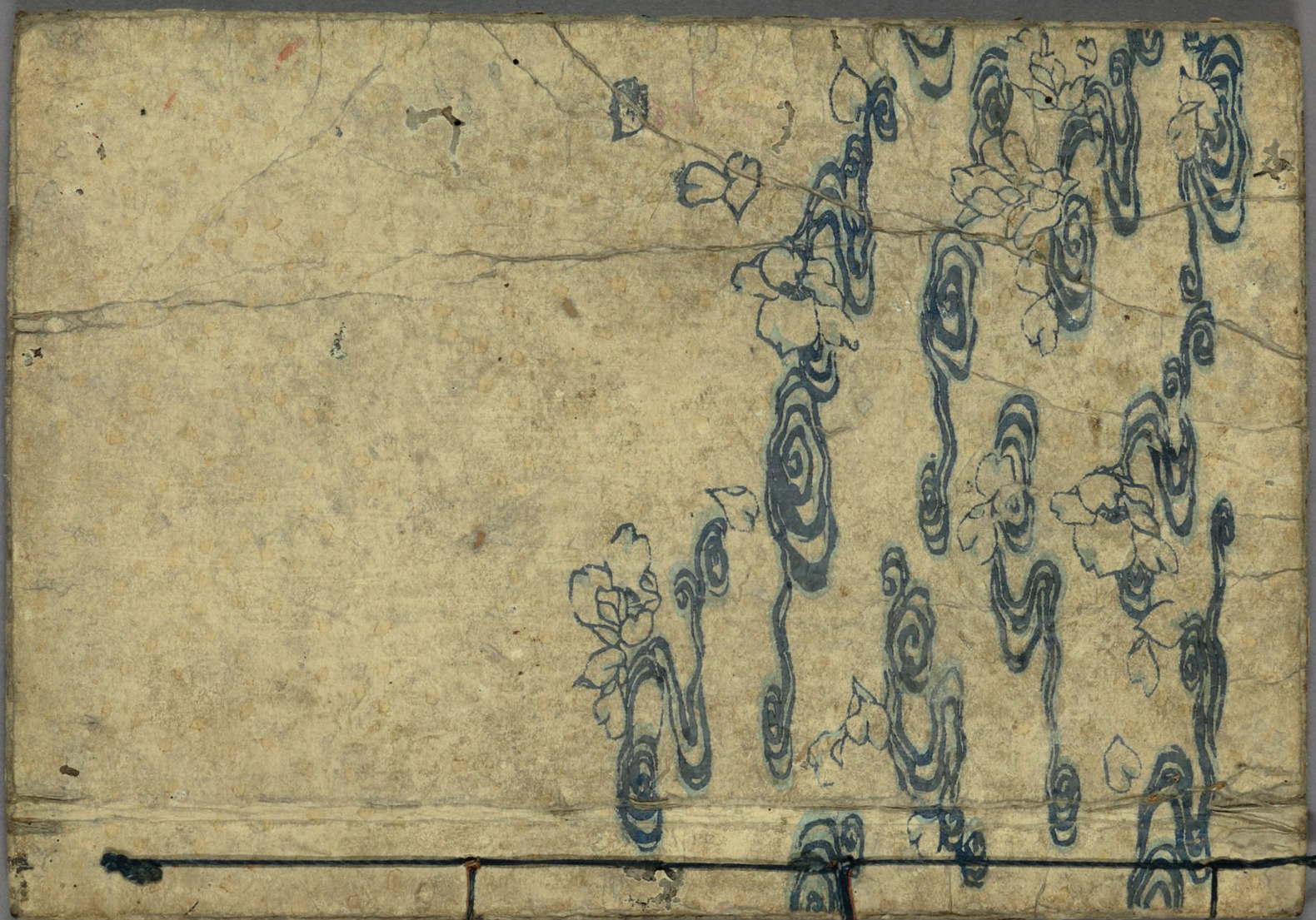
今日休ト
左かね自方
有像第六

畑と兄吉
錢ト花前開
鶏示凶吉

あるさく負方當國に在さるを領主上杉憲定の執事なる長尾景賢に
報じ景賢能く大軍をもて推寄せ攻るに妻時に防戦ふるゝ負方も
士卒多くもあれど名ある家臣は戦没し妻子眷屬四落八散に生死も知られず
做されて殘燼ゆゑに燃るに由なし然けれども負方主は辛く立退き當国
弥彦山に登り且く山居あるに程なく異人に邂逅して仙書一巻を授
けられ且隱形五遁の内中水火二遁の仙術を其の折傳授せられけるに是より負
方主は食ざれども餓ずして山に在ること一稔可に後越後を立去て本国に
上野に赴き深く潛び御座せしに應永十年の夏四月下旬脇屋右少將義
隆の相模に底倉に敷れ給ひしより以下京鎌倉の下知として負方の隱
れ在る嚴に索ねよとて州郡に徇知せに骨相書をもて捜せしに上野に
落着ゆきくゝて遽に立去る信濃甲斐に由縁許或は一年或は半年潛び

光閉を送りゆきに其居を討兵を蒐られて危殆の屋あるに那仙術の奇特あて火に値
へば火に隱れ水に遇へば水に隱れて虎口を脱れ難きに是より後宿所を定めず東八ヶ国を徧歴
あるに會稽の恥をも雪めんと欲すれども這時未だ後ひまなく忠義の志相
ぎりけり譜第恩顧の勇臣に畑六郎二時種とふの有り他に新田の四天王隨一人とも
えるる畑六郎左衛門尉時能が孫なる武勇の勇敢に大父時能に劣るとなく筋力飽
まで悍くして千鈞の弩を揚げるに負方主と共侶に幾遍となく危難を脱
れるに主従二人に過ぎざるも影の肢體に從ひて正首に仕へる然に陸奥に落ぬ
しより十稔あまりの光閉を経て應永十七年の夏の比より下総なる千葉に入り亂び鎌
倉の管領を竊に怨るより隱謀の企ありとふ世の風聲の彼此に少えるに負方
主従相然びて千葉に下総の舊家に千葉葛飾印幡數郡の領主なるに
のとに相馬武石大須賀国分原馬加等の氏族なる他今謀叛の旗を揚げ

千葉の城ゐ盾笠竜ゐび一朝ゐ落べゐ。且その先代、葉ゑ宗胤い俺先大父贈中納
言判官ゐ従ひまゐりて三井寺合戦の折陣没しゐゐ。宗胤の只自ら胤い北国落まゐ自方
ゐりーゐ先大父の亡のひ一後心ゐるまゐ引返しゐ尊氏ゐ従ひゐ。然ゐれ宗胤の嫡子胤貞
始終忠義の志抜まゐ征西将軍の宮筑紫へ御下向のゐ供奉しまゐりて大隅守ゐ任
せられ肥前国ゐ領しゐ。是ゐの舊記由縁ゐあれゐ編ゐ那地へ赴ゐ。その為体ゐ顧る
世の風声の虚実ゐ知るべく。其処ゐ便宜ゐあるまゐ然いとく猛可ゐ出ひ起ゐ行装ゐ
整て笠ゐ傾くゐと立出ゐべ畑六郎一時種ゐ奴隷の姿ゐ打扮て裳ゐ引折脚絆ゐ穿ゐ一
刀ゐ腰ゐゐと。行果ゐ駝ひゐ。外見ゐ潜ゐ主従二人後ゐ従ひ先ゐ立て下給ゐ投ゐ急ぐ
程ゐ。あの年漆月の下旬ゐ千葉の城下ゐ程遠ゐ福草村まゐ来ゐゐ。早意貞方
主這頭ゐ過ゐゐ折又甚麽ゐる話説ゐあるゐ。次の巻ゐ解分ゐ聴ねゐ。

開巻驚奇侠客傳第一集巻之二終

今金